日本の大学における GPA 制度の導入と運用に見出される特徴と問題点
- Web 検索による研究調査 -

綾　皓二郎*
Email: aya.k2015h27@gmail.com

*: みやぎインターカレッジコープ

◎Key Words　GPA 評価法，成績インフレ，互換性

１．はじめに

GPA（Grade Point Average）制度がわが国で最初に導入されたのは 1953 年度の国際基督教大学である。その後数十年間，GPA 制度が他大学から関心を持たれることはほとんどなかったが，1998 年の大学審議会答申(1)および 2008 年の中教審答申(2)が契機となって，全国の大学で GPA 制度の導入が進んできている。学部段階での導入率は, 文科省の調査(3)によれば, 2006 年度 40%，2008 年度 46%，2013 年度 72%となっている。

本稿では，日本がモデルとした米国の GPA 制度，日本的GPA 制度の特徴や対外通用性／互換性の問題について検討する。日本の大学の GPA 評価法については，本報告で取り扱っていない課題を含めて，別に詳細に報告している(4)。

２．Web 検索による調査

Web 検索の発達で誰もが必要なデータの収集や文献調査が容易に行えるようになった。これは研究費と人手のない，地方に住む定年退職した元大学教員にとって大変便利な調査方法である。この報告では GPA 制度を調査するために，郵送による調査に代えて，Web 検索を全面的に採用した。すなわち，経費と時間を節約するために，大学の Web ページにおかれた資料（履修規程，学生便覧など）やインターネット上にある論文・データなどを検索して調査を行った。大学に個別の問合せは行っていないので，一部に不明な箇所がある。

この調査で判明したことは，次の点である(4)。

・成績評価法や GPA 制度を説明する資料を検索しても不明な大学がかなりある。
・検索はヒットするが，必要な情報にアクセスするのに手間がかかる大学が少なくない。
・学生および授業の成績評価結果のデータを公開している大学があまりに少ない。
・成績証明書の記載事項を説明している大学も少ない。

これらは，日本の大学に限っていえば，教育情報の公表の一環として，すべての大学が成績評価の Web ページを共通様式で作成すれば，解決する問題である。

３．アメリカの大学の GPA 制度

5 段階 GPA 評価法が中教審答申で米国において一般的に行われている学生の成績評価法として解説されている(2)。表 1 は，日米教育委員会によるものである(5)。

表 1　アメリカの 5 段階 GPA 評価法

段階	RS	LG	GP	合否
1	90 - 100	A	4.0	合格
2	80 - 89	B	3.0	合格
3	70 - 79	C	2.0	合格
4	60 - 69	D	1.0	合格
5	0 - 59	F	0.0	不合格

ここで, RS は原成績（Raw Score）, LG は文字成績（Letter Grade），GP（Grade Point）は成績評価点である。

中教審答申の解説では RS は空集合としており，アメリカでは空集合が一般的という指摘がある(6)。日本の大学では，RS は表 1 と同様に 100 点法で定める場合がほとんどであるが，単に目安とする，あるいは空集合とする大学もある。

GPA は，すべての履修科目について総和をとる，次式により算出される。

$$\mathrm{GPA} = \Sigma\,\mathrm{GP} \times \text{単位数} \;/\; \Sigma\ \text{単位数}$$

総和をとる期間により, 学期 GPA と通算 GPA がある。

米国の大学の GPA 評価法には，表 1 に示す LG については 5 段階 A-F 方式，GP については 4 点尺度（4-point scale）の基本形がある(4)。基本形には最上位 LG として S はないことに注意する。解説では，便宜上 5 段階の LG でなされることが多いが，実際の運用では，基本となる A, B, C, D の LG に＋，－を付与して，LG に対応する GP に, LG の＋，－に応じて 1/3（0.3, 0.33）の増減をするのが標準形式となっている。そこで LG と GP との対応は，ごく少数の例外を除いて，どこの大学でも共通である。たとえば，B+ は 3.3／3.33 であり，D は 1.0 で合格である。

半田の郵送による調査(6)（2009 年，米国には 2000 校以上の 4 年制大学があるが，発送数 500 で回答数 165

大学；調査対象校を選んだ基準と大学名は不明）では，米国で 5 段階の LG で評価している大学は 32%，6〜9 段階が 7.9%，10〜12 段階が 57%，13 段階以上は 0%であった。

半田の調査は古いので，著者は 2016 年に Web 検索により調査を行った。調査対象とした大学は，U.S. News & World Report 社が毎年発表する National Universities & Liberal Arts Colleges Rankings 2016 に登場する#1 から#30 までの各 30 校，計 60 校の有力大学とした。この調査により近年アメリカの有力大学の GPA 評価法では LG5 段階は稀で，10 段階以上が一般的であり，12，13 段階が増えていることが確かめられた。13 段階とは，A，B，C，D にそれぞれ＋，－を付けて 12 段階，F が 1 段階で計 13 段階とするものである。12 段階は，13 段階と比べて，A レベルを 2 段階にとどめるか，D レベルを 2 段階にとどめるかの違いである。

LG5 段階評価を採用している大学は，MIT と Carnegie Mellon の 2 校 3.3%（GP4 点尺度も併せると後者の 1 校のみ），9 段階 1 校，10 段階 7 校 12.7%，11 段階 11 校 18.3%，12 段階 17 校 28.3%，13 段階 16 校 26.7%，16 段階 1 校，不明 4，GPA 不採用 1 （Brown）である。GP の最大値は，4.0 が 38 校 63.3%と多い。A+ の場合は 4.0 にとどめておく大学が多いが（Univ. California, Swarthmore など），4.3／4.33 とする大学も少なくなく（Stanford, Williams など）11 校 18.3%ある。さらに 5.0 が 1 校（MIT），その他 5 校，不採用 1，不明 4 である。Wesleyan Univ.の 1 校は，LG16 段階で 100 点法の RS と GP で，GP4.0／4.3 点尺度に換算するために，部分的に後述の fGPA を用いている。表 2 に今回の調査において判明した 13 段階 GPA 評価法を示す。

表 2　アメリカの 13 段階 GPA 評価法

段階	RS	LG	GP	合否
1		A+	4.0／4.3／4.33	合格
2		A	4.0	合格
3		A-	3.7／3.67	合格
4		B+	3.3／3.33	合格
5		B	3.0	合格
6		B-	2.7／2.67	合格
7		C+	2.3／2.33	合格
8		C	2.0	合格
9		C-	1.7／1.67	合格
10		D+	1.3／1.33	合格
11		D	1.0	合格
12		D-	0.7／0.67／1.0	合格
13		F	0.0	不合格

現在の米国の GPA 評価法は，実際の段階数は様々であるが，表 1 の 5 段階基本形を元に標準形式に従って多段階評価法が作られているという特徴がある。LG が 5 段階から 9 段階以上に移行した理由としては，5 段階では成績評価として粗すぎる問題点があり，10 段階以上にしても，現在ではコンピュータを使えば GPA の算出が容易にできるようになったことが考えられる。

４．日本の大学の GPA 制度

Web 検索による GPA 制度の調査は，2016，17 年度の国立大学の全 82 校（学部のみ。学部により評価法が異なる大学が少数ある）を対象にして行った。

LG の段階数では 4 段階が 1 校，5 段階が 51 校 62%（GP では 5 段階が 43 校，42 段階が 8 校），6 段階以上が 10 校 12%である（6 段階 3 校，8 段階 3 校，11 段階 4 校）。GP の最大値は，4.3 以上が 17 校 21%（5.0 が 3 校，4.55 が 1 校，4.5 が 6 校，4.3 が 7 校），4.0 が 44 校 54%，3.0 が 1 校である。不明と未導入が 20 校 24%あるが，未導入は東京大学など数少ない。

半田の郵送による調査[6]（2004 年，調査対象校は GPA 制度を全学統一基準で導入済みの 66 大学で，回答数 47 大学；国立 9 校，公立 1 校，私立 37 校）では，LG の段階数が 5 段階が 70%，GP の最大値を 4.0 としている大学が 83%であった。

近年になって，LG の段階数が 6 段階以上，GP の最大値を 4.3 以上とする大学が漸増していることが認められる[4]。次にいくつかの大学の GPA 評価法を表にして，これを確認する。なお，以下の表では不合格の LG は，紛らわしさを防ぐため，すべて F で代表させる。

表 1 の 5 段階評価法を導入している国立大学は 7 校と少ない。同じ 5 段階法でも表 3 を採用している国立大学は 30 校と多い。表 1 と表 3 の違いは，表 3 では最上位 LG を S（／A+／AA／秀）としていることである。GP-1 は，表 1 の GP と同じであるが，大阪大学（2006），東北大学（2016）など 25 校，GP-2 を取る大学は，GP の最大値 4.3 が名古屋大学（2011），神戸大学（2012）筑波大学（2016），一橋大学（2018）の 4 校，GP4.5 が横浜国立大学（2007）の 1 校である。

表 3　5 段階 GPA 評価法

段階	RS	LG	GP-1	GP-2	合否
1	90 - 100	S	4.0	4.3／4.5	合格
2	80 - 89	A	3.0	4.0	合格
3	70 - 79	B	2.0	3.0	合格
4	60 - 69	C	1.0	2.0	合格
5	0 - 59	F	0.0	0.0	不合格

5 段階評価法には，GP の与え方に fGPA（functional GPA）[6] と呼ばれる方法を採用している大学（8 校）もある。GP の段階数は RS = 0 - 100 の整数であれば 42 段階となる。RS = 0 - 59 は GP = 0.0 で 1 段階，RS = 60 - 100 は GP ≠ 0 の 41 段階であるが，GP は RS からの変換式により異なる。表 4 は GP =（RS – 55）／10 とする場合で，静岡大学（2009），お茶の水大学（2011），岡

山大学（2016）など 5 校がある。他には GP＝（RS –54.5）／10 の宮崎大学（GP の最大値 4.55），GP ＝（RS – 50）／10 の徳島大学，新潟大学（2004）がある（GP の最大値 5.0）。fGPA 法は 100 点法による RS を GP に 1 対 1 に対応させているので，従来の GPA 法と比べると，より厳密で公正な評価となっている[(4)(6)]。

表 4　5 段階 GPA 評価法－fGPA 法

段階	RS	LG	GP	合否
1	90 - 100	S	3.5 - 4.5	合格
2	80 - 89	A	2.5 - 3.4	合格
3	70 - 79	B	1.5 - 2.4	合格
4	60 - 69	C	0.5 - 1.4	合格
5	0 - 59	F	0.0	不合格

6 段階評価法を導入している大学は，3 校が確認できた。表 5 は信州大学（2014），表 6 は京都大学（2016）の場合である。

表 5　6 段階 GPA 評価法－1

段階	RS	LG	GP	合否
1	90 - 100	S	4.00	合格
2	80 - 89	A	3.33	合格
3	70 - 79	B	2.67	合格
4	60 - 69	C	2.00	合格
5	50 - 59	D	1.00	不合格
6	0 - 49	F	0.00	不合格

表 6　6 段階 GPA 評価法－2

段階	RS	LG	GP	合否
1	96 - 100	A+	4.3	合格
2	85 - 95	A	4.0	合格
3	75 - 84	B	3.0	合格
4	65 - 74	C	2.0	合格
5	60 - 64	D	1.0	合格
6	0 - 59	F	0.0	不合格

8 段階評価法を採用している大学は 3 校ある。表 7 は京都工芸繊維大学の場合であり，埼玉大学（2015）は RS は空集合であり，九州工大工学部は LG が空集合である。LG は，＋付で 0.5 の増分としている。

表 7　8 段階 GPA 評価法

段階	RS	LG	GP	合否
1	90 - 100	S	4.0	合格
2	85 - 89	A+	3.5	合格
3	80 - 84	A	3.0	合格
4	75 - 79	B+	2.5	合格
5	70 - 74	B	2.0	合格
6	65 - 69	C+	1.5	合格
7	60 - 64	C	1.0	合格
8	0 - 59	F	0.0	不合格

11 段階評価法を採用している大学は 4 校ある。表 8 は山梨大学（2012），表 9 は北海道大学（2015），表 10 は東京外国語大学（2016）の場合である。同じ 11 段階であるが，評価法の中身は三者三様である。

表 8　11 段階 GPA 評価法－1

段階	RS	LG	GP	合否
1	95 - 100	S	4.0	合格
2	90 - 94	S-	3.7	合格
3	87 - 89	A+	3.3	合格
4	83 - 86	A	3.0	合格
5	80 - 82	A-	2.7	合格
6	77 - 79	B+	2.3	合格
7	73 - 76	B	2.0	合格
8	70 - 72	B-	1.7	合格
9	66 - 69	C+	1.3	合格
10	60 - 65	C	1.0	合格
11	0 - 59	F	0.0	不合格

表 9　11 段階 GPA 評価法－2

段階	RS	LG	GP	合否
1	95 - 100	A+	4.3	合格
2	90 - 94	A	4.0	合格
3	85 - 89	A-	3.7	合格
4	80 - 84	B+	3.3	合格
5	75 - 79	B	3.0	合格
6	70 - 74	B-	2.7	合格
7	65 - 69	C+	2.3	合格
8	60 - 64	C	2.0	合格
9	50 - 59	D	1.0	不合格
10	0 - 49	D-	0.7	不合格
11	評価無	F	0.0	不合格

表 10　11 段階 GPA 評価法－3

段階	RS	LG	GP	合否
1	90 - 100	S	4.0	合格
2	87 - 89	A+	3.7	合格
3	83 - 86	A	3.3	合格
4	80 - 82	A-	3.0	合格
5	77- 79	B+	2.7	合格
6	73 - 76	B	2.3	合格
7	70 - 72	B-	2.0	合格
8	67 - 69	C+	1.7	合格
9	63 - 66	C	1.3	合格
10	60 - 62	C-	1.0	合格
11	0 - 59	F	0.0	不合格

公立・私立大学の評価法まで調べると，さらに多様となり，評価法が乱立状態にあることが認められる[(4)]。

以上から，日本の大学の GPA 評価法については，

・米国の一般的な GPA 評価法に十分留意していない。

・評価法に基本形と標準形式がない。

・評価の設定が標準的な在り方に揃えられていない。
・GPA に国内／国際通用性があるとは言い難い。
・米国の GPA との互換性に問題がある（後述）。
といえる[4]。具体的にいくつか指摘すると
・RS と LG，GP との対応が不揃いである。
・LG の付け方が各大学でばらばらである。たとえば，A+ の上に S- や S があったりする。不合格の LG に実際には D, E, F が用いられていて紛らわしい。
・最低の合格レベルの RS, LG, GP が各大学でばらばらである。たとえば，青森公立大学では，RS = 50-59, LG = D, GP = 1.0 で合格である。

５．日米大学間の GPA の互換性

● **米国の大学の成績インフレ**（grade inflation）

米国では 1960 年代以降一貫して成績のインフレーションが続いている[7]。GPA の平均値は 1950 年代は 2.52 であったが，現在の米国ではほとんどの教員が A か B をつけており，2013 年には 3.15（私立大学では 3.31）まで上昇している[8][9]。私立大学の平均の成績が州立大学より高いのは，私立のほうが授業料が高いので，見返りに対する期待も大きいからだと考えられている。4 年制の大学では A (4.00) が 42%である。成績インフレはトップ大学で特にひどく，たとえば，Yale 大学では 62%の成績が A (4.00) か A- (3.67) であるし，Harvard 大学の平均成績は A- (3.67)である[10]。この 2 つの大学の GPA 評価法では最上位のグレードが A (4.00) であり，インフレが起こると一番上の A に成績が集中してしまう。成績インフレの傾向を助長している要因として，学生による授業評価を意識して成績を甘くする教員がいることが指摘されている。この成績インフレは，GPA 制度が厳格な成績評価とは関係しないことをデータで裏付けている。

● **成績インフレに対応する日本の GPA 評価法**

GPA の互換性の問題を取り上げる場合には，米国の GPA 評価に起きている成績インフレへの対応を欠かすことはできない。なぜなら，日本の LG5 段階，GP4 点尺度による評価法（表 1，表 3GP- 1 ）では，GPA 値が米国の大学では過小評価されるからである。たとえば，GPA=2.8 の学生は平均以上の優秀な学生だが，同スコアを持ってアメリカへ行くと平均以下という扱いにされてしまうという報告がある（北海道大学の旧評価法：表 3GP-1）[11]。そこで，北海道大学では，GPA 制度の国際通用性の向上を目的として，2015 年度から表 9 の 11 段階評価法を運用している。

成績インフレが進んでいることに対応して，対米互換性を高める GPA 評価法としては，
①最上位グレードの GP を 4.3 以上とし，下位グレードの GP も高くする（表 3 GP-2，表 4 fGPA，表 6，表 9）
②上位グレードの GP は 4.0 にするが，6 段階以上の多段階にして，下位グレードの GP をかさ上げする（表 5, 8, 9, 10）ことが考えられる。

● **日本の大学の成績インフレ**

大学の大衆化がマス段階に入って以降，学力低下が続いているといわれているが，学力低下が GPA に現れたという報告は見受けられない，学力低下により単位認定はインフレ状態になりつつある，という指摘がすでに 2006 年になされている[12]。

● **成績証明書への GPA の記載と注意事項**

日本の大学の GPA 評価法がそのまま海外で通用するわけではないので，海外企業や留学先の大学に成績証明書を提出する際には，自大学での GPA 評価法の仕組みの説明が必要で，留学の場合には相手先大学の GPA 評価法での LG と GPA 値への換算が必須となる[4]。

６．おわりに

本稿では，米国を除く外国の大学における GPA 評価法や GPA の国際的互換性については詳しく考察することができなかった。これらについては，別の機会に報告したい。

参考文献

注：調査した各大学の Web サイトの URL を参考文献として引用することは煩雑になるのでは省略した。

(1) 大学審議会：“21 世紀の大学像と今後の改革方策について（答申）” (1998)
(2) 中央教育審議会 :“学士課程教育の構築に向けて（答申）” (2008)
(3) 文部科学省：“平成 25 年度の大学における教育内容等の改革状況について” (2015)
(4) 綾　皓二郎：“GPA (Grade Point Average) 成績評価法の理念と実際 ～日本の大学における GPA 評価法～”, 教育情報学研究（受理）
(5) 日米教育委員会：“アメリカ留学公式ガイドブック”, アルク (2015) http://www.fulbright.jp/study/schedule/step4_01.html
(6) 半田智久 (2012)：“GPA 制度の研究—functional GPA に向けて—”, 大学教育出版 (2012)
(7) Levine, A., Cureton, J, S., 丹治めぐみ訳：“現代アメリカ大学生群像”, p.180, 玉川大学出版部 (2000)
(8) GradeInflation.com : “National Trends in Grade Inflation, American Colleges and Universities”, http://www.gradeinflation.com/
(9) 潮木守一：“大学再生への具体像　第 2 版—大学とは何か”, p.286, 東信堂 (2013)
(10) アキ・ロバーツ，竹内　洋：“アメリカの大学の裏側”, p.193, 朝日新聞出版 (2017)
(11) 北海道大学：“新 GPA 制度及び厳格な卒業認定基準の導入について（通知）” (2014)
(12) 後藤和雄：“GPA 定義の問題点とその一般化”, 鳥取学教育総合センター紀要，第 3 号，pp.11-27 (2006)